

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

|  |                     |                        |       |
|--|---------------------|------------------------|-------|
| 博士の専攻分野の名称<br>(Major Field of Ph.D.)   | 博士 ( 教育学 )<br>Ph.D. | 氏名<br>(Candidate Name) | 唐 然   |
| 学位授与の要件  | 学位規則第4条第1・2項該当      |                        |       |
| 論文題目 (Title of Dissertation)<br>中国人上級日本語学習者の文章読解に及ぼすイメージ教示の効果  |                     |                        |       |
| 論文審査担当者 (The Dissertation Committee)   |                     |                        |       |
| 主 査 (Name of the Committee Chair)  |                     | 教授                     | 松見 法男 |
| 審査委員 (Name of the Committee Member)  |                     | 教授                     | 中條 和光 |
| 審査委員 (Name of the Committee Member)  |                     | 教授                     | 永田 良太 |
| 〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)   |                     |                        |       |
| <p>本論文は、中国語を母語とする上級日本語学習者（以下、中国人上級日本語学習者）が日本語の文章を読む時、文章で記述された事物や場面に関する視覚的イメージを思い浮かべるように指示を受けること、すなわちイメージ教示を受けることによって、文章の理解と記憶が促進されるのか否か、またイメージ教示を受ける場合、イメージ教示を受けない場合と比較して、文章を読む過程での内容に関するイメージ表象の構築がどのように異なるのかについて、実験的に検討したものである。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、文章の理解に関する理論やイメージ想起の効果を説明する二重符号化理論、および先行研究を概観した。次に、文章の読解過程におけるイメージ表象の構築を検討する際に重要となるワーキングメモリモデルを説明した。そして、先行研究の問題点を指摘した上で、本研究の研究課題を提示した。</p> <p>第2章では、4つの実験について述べた。実験1では、中国人上級日本語学習者が日本語文を読む際にイメージ教示を受けない場合でも、イメージ表象が活性化するか否かについて、絵判断課題を用いて調べた。絵に対する正反応時間から、上級学習者は自らイメージ表象を形成できることがわかった。実験2では、中国人上級日本語学習者が日本語の文章を読んで記憶する際の、読み手のイメージ能力と文章のイメージ性の組み合わせがイメージ教示の効果に及ぼす影響を明らかにした。遅延筆記自由再生テストの正再生率から、イメージ教示はイメージ能力の高い学習者における文章の長期的記憶に有効であることが示唆された。実験3と実験4では、中国人上級日本語学習者が日本語の文章を読む過程において、イメージ教示を与えない場合（実験3）とイメージ教示を与える場合（実験4）を比較し、文章内容に関するイメージ表象の構築が促進されるか否かを、ワーキングメモリの働き方を調べる二重課題法を用いて検討した。読解中の理解の構築を測定するため、オンライン測定法の1つである矛盾検出法を用いた。その結果、イメージ教示の有無にかかわらず、上級学習者は一貫性を保った文章理解が可能であり、読みの過程においてイメージ表象の構築が伴うこと、またイメージ教示によって文章内容に関する鮮明なイメージ表象の構築が促進されることがわかった。視空間的要素が伴う背景知識の活性化が一定程度抑制される条件では、文章内容に関するイメージ表象を集中的に構築できるため、文章内容に関する一貫性のある理解と詳細情報に至る理解・記憶が効率的に行われることが示唆された。</p> <p>第3章では、4つの実験結果をまとめ、イメージ教示が文章の理解と記憶に及ぼす効果と、読解中のイメージ表象の構築に及ぼす効果について総合的に考察した。そして、本研究の学術的意義と日本</p> |                     |                        |       |

語教育への示唆を述べ、今後の課題に言及した。

本研究は、以下の3点で高く評価できる。

1. 従来、第二言語学習者を対象とした読解研究では扱われなかったイメージ教示の効果を規定する要因を探り、読み手のイメージ能力に着目して、日本語の上級学習者であっても、イメージ能力の高い学習者と低い学習者とでは、イメージ教示が日本語の文章記憶に及ぼす影響が異なることを明らかにした点である。
2. ワーキングメモリモデルに基づき、文章の読解過程におけるイメージ表象の構築が、イメージ教示を与える場合と与えない場合とでどのように異なるかを明らかにした点である。
3. 日本語上級学習者におけるイメージ教示の効果を検証する際、これまでのオフライン測定法に加えてオンライン測定法も採用し、すなわち矛盾検出法を採用し、第二言語の文章理解研究における方法論上の発展に寄与した点である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和6年2月15日

備考 要旨は、A4版2枚（1,500字程度）以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed A4 size, 2 pages (about 500 words).)